

徳一の「如是我聞」訓読をめぐる二、三の問題

師 茂樹*

2006年6月9日

1 問題の所在

『守護国界章』巻中之中・弾謗法者偽訳如是章第十二には、徳一が經典冒頭の「如是我聞」を万葉がなを用いた訓読によって解釈するのが最澄が批判する、という論争が見られる。この論争の概要については田村晃祐氏がすでに明らかにされているが ([2], pp. 553-556)、万葉仮名や訓読という方法についてはこれまで検討されたことがなかったように思われる。

本発表では、徳一の訓読とそれに対する最澄の反論に注目し、『守護国界章』(『中辺義鏡』)の文献学的な問題、最澄の翻訳観などについて考察したい。

2 徳一の上代特殊仮名づかい

2.1 はじめに

上代の日本語は現代日本語とは異なる音韻体系を有しており、現在では同音になっているオキギケゲコゴシジソゾトドノヒビヘベホボミメモヨロの音を表す万葉仮名に、甲乙二種類の区別があったことが知られている。この区別は、時代を経るごとに衰退していき、平仮名が使われる頃にはほとんど区別がなくなっていったとされる。

- 『古事記』(712年)ではモを区別し、曖昧ながらもオシジホボに区別が見られるが、『日本書紀』(720年)『万葉集』(759年以前)ではその区別がなくなっている。
- 『万葉集』ではト・口の区別が曖昧になってくる(東歌・防人歌などで顕著)。
- 『新訳華嚴経音義私記』(奈良末~平安初期)では、トを除き概ね区別されている。
- 『新撰字鏡』(昌泰年間〔898~901〕)では、コを除き区別されなくなっている。

以下、『守護国界章』巻中之中・弾謗法者偽訳如是章第十二に見られる徳一の万葉仮名表記について検討する。一行目に原文、二行目に字音、三行目に『伝教大師全集』頭注の読み仮名を並列し、甲類は上線(き)、乙類については下線(こ)で表した*¹。

* 花園大学; s-moro@hanazono.ac.jp

*¹ 本節については、花園大学の橋本行洋氏にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。

2.2 譬喩 (伝全 2, 430 / 大正 74, 194b)

許 禮 阿* 何 伎 伎 之 何 其 都* 之
こ れ あ が き き し が こ と し
コ レ ワ ガ キ キ シ ガ ゴ ト シ

- 「阿」一人称を「あ」とする例は多い*²。
- 通常は「ことし」であるため、甲乙に乱れが見られる(以下同)。

2.3 教誨 (伝全 2, 431 / 大正 74, 194c)

伽 久 乃 其 都 久 阿 加* 毛 都* 爾 伎 計
か く の こ と く あ か も と に き け
カ ク ノ ゴ ト ク ワ ガ モ ト ニ キ ケ

- 「加」は清音「か」であるが、濁音仮名としても流用される。
- 通常は「もと」であるため、甲乙に乱れが見られる。

加 久 乃 其 都 久 伎 計 阿 何 伎 伎 之 都* 許 呂 乎
か く の こ と く き け あ が き き し と こ ろ を
カ ク ノ ゴ ト ク キ ケ ワ ガ キ キ シ ト コ ロ ラ

- 通常は「ところ」であるため、甲乙に乱れが見られる。

2.4 譬喩 (伝全 2, 432 / 大正 74, 194c)

可 久 乃 其 都 久 曾* 阿 可* 伎 伎 之
か く の こ と く そ あ か き き し
カ ク ノ コ ト ク ソ ワ カ キ キ シ

- 助詞「曾」は「そ」であるが、元来清音で奈良時代から平安時代にかけて濁音化が進んだとされる。
- 「可」は「何」の誤写か。

2.5 許可 (1) (伝全 2, 432 / 大正 74, 195a)

可 久 乃 其 都 之 曾 阿 何 伎 伎 之 都 許 呂 曾
か く の こ と し そ あ が き き し と こ ろ そ
カ ク ノ ゴ ト シ ソ ワ ガ キ キ シ ト コ ロ ソ

*² 「あ」「あれ」は「わ」「われ」より単数的・孤立的なニュアンスがあるとする説もある。

2.6 信可審定 (伝全 2, 433 / 大正 74, 195a)

可 久 乃 其 都 伎 乎 波* 阿 禮 伎 伎 (之)*
か く の ご と き を は あ れ き き (し)
カ ク ノ ゴ ト キ ヲ バ ワ レ キ キ

- 「波」は「婆」(ば)の誤写か。
- 文末「之(し)」脱落か。
- 平安初期(830年頃)の白点と永長2(1097)年の朱点が記入されている西大寺本『金光明最勝王経』では、「是(の)如キことを我レ聞きたまへキ」と訓読しており([1])、徳一の訓読との共通性が見られる。

2.7 考察

徳一の上代特殊仮名づかいは概ね原則通りであり、甲乙の乱れはト音に留まることから、同時代の『新訳華嚴経音義私記』の傾向と非常に近い。徳一『中辺義鏡』の成立は、田村晃祐氏によれば「『守護章』の完成が弘仁九年と見られるので、恐らく弘仁八年あるいはそれ以前、遅くとも弘仁九年の初期に考えるのが適当であろうと思う」([2], p. 55)とのことであり、少なくとも成立のはっきりしている『守護章』の書かれた弘仁九(818)年を下ることはないであろうから、現行の『守護章』がこの時代の上代特殊仮名づかいを正確に残していることが予想される。

一方、『伝教大師全集』の底本は以下の通りである。

- 原本 享保十八(1733)年 村上勘兵衛出版本全九巻
- 対校本
 - イ本 元和三(1617)年 比叡山西塔北谷正観院蔵版全九巻
 - 口本 仙波喜多院所蔵慈等師校訂本全九巻
- 再刊対校本
 - 一本 大谷大学所蔵 寛文九(1669)年 正吉辰版本全九巻

上に述べたように、9世紀後半以降、甲乙の区別がなくなって以降、石塚龍磨(1764~1823)が『假名遣奥山路』において上代特殊仮名づかいの包括的な紹介をするに至るまで、上代特殊仮名づかいによって正確に表記できる人はいなかったと言ってよい。したがって、『守護国界章』の伝写の過程において、(すくなくともこの部分に関しては)書写者の創作、挿入や、書写上の乱れがなかったことは明らかであろう(逆に、『伝教大師全集』頭注のカタカナ表記が後世の加筆であることも明らかであろう)。これは、『守護国界章』の文献学的な性格を考える上で、重要であると思われる。

3 最澄の批判の言語依存性

田村晃祐氏がすでに分析したように、最澄の批判は、徳一の『仏地経論』の解釈ないし援用の仕方の不適切さに対するものに加えて、訓読という方法の不適切さについても及んでいる。ここでは後者について分析したい。

徳一の訓読	最澄の批判	最澄の挙げる実例
許禮阿何伎伎之何其都之	今此譬喩轉、爲顯句頭義。	新譯經首、除却上字、直導「如是」(「如是我聞」)。
伽久乃其都久阿加毛都爾伎計 / 加久乃其都久伎計阿何伎伎 之都許呂乎	其論意趣、引句腹如是。	舊譯經首、或置「聞如是」、或「我聞如是」。
可久乃其都久曾阿可伎伎之	其論意者、亦復爲成句頭「如是」、重引句頭語例。	新譯經首、除上句意、蓋依斯轉(「如是我聞」)。
可久乃其都之曾阿何伎伎之都 許呂曾	其論正義、引假説語例、釋成經首言。此許可語例、當句腹「如是」。	舊譯經首、阿難曰「我聞如是一時」。
可久乃其都伎乎波阿禮伎伎	(義勢同上、繁更不述。)	

徳一の訓読は、いずれも「如是我聞」の訓読^{*3}であると思われるが、「加久乃其都久伎計阿何伎伎之都許呂乎(是の如く聞け、我が聞きし所を)」のような倒置した例があることから、「如是我聞」という文字の順を保つことを意識しているのではないかと推測される。本章は徳一による一連の『法華文句』批判(田村晃祐氏の説に従って厳密に言えば仮称『天台法華義』批判)のひとつであるうえ、徳一が批判にあたり『法華玄賛』をベースとしていることからわかるように、ここで議論されている「如是我聞」は、第一義的には『妙法華』のそれであろう。したがって、徳一がこのような態度で訓読するのは不自然ではない^{*4}。

これに対して最澄は、「句頭」「句腹」という用語を用いたり、「我聞如是」などの漢訳の例を出すなどして、倒置を使っても「如是」を訓読の文頭に置こうとする徳一の態度を批判しているものと思われる。すなわち最澄は、「如是我聞」は総句(すべて意味を包含した句)としての翻訳であり、別句(個別の意味を表す句)の意味に基づいて翻訳する場合には、「我聞如是」や「聞如是」のように「如是」の位置が移動するはずである、と考えていたようである^{*5}。これと似たような議論として、慧遠『大般涅槃經義記』の例をあげることができるだろう。

又温室經初云「阿難曰、吾從佛聞如是」。故知阿難名佛所説、以爲「如是」。但方言不同。彼温室經順此方語、故説「從佛聞於如是」。餘經多順外國人語、先舉「如是」、後彰「我聞」。(大正 37, 616a)

このような言語(方言、方語)の違いを意識した解釈は、慧遠だけでなく広く見られるものである。これに関連して、この章の最後に、

麤食者、四轉五六、日本方言、非_三但相_二違本論_一、亦不_レ能_レ釋_二句腹「如是」_一。正法華經・盂蘭盆經・浴像經^{*6}等「如是」等、何以得_レ轉。

と最澄が述べている点は注目される。上に述べたように、ここでの議論は『妙法華』をめぐるものである。単純に『正法華經』冒頭の「聞如是」と『妙法華』冒頭の「如是我聞」のサンスクリット原文を同じであると考

^{*3} 現代の訓読とは異なり、近世以前の訓読は「漢字の意味をただしくとらえて、文意を誤らず、それらしく訓読されていれば、一つ一つの漢字は、その作者の用字意識どおりによむことを、必ずしも要求される訳ではな」かった([4])点には注意が必要。

^{*4} さらに言えば、[5]で指摘されている古代の訓読=音読主義とでも言うべき傾向との関係も指摘し得るだろう。

^{*5} 最澄が徳一に対する批判として「不辨方言」と言っているのは、「(インドや中国、日本などの)各地方の言語の違いを理解していない」という意味であるとも理解できる。

^{*6} 田村晃祐氏が指摘するように([2], p. 575) 現行『浴像經』は「如是我聞」で始まる。

えるならば、最澄の「句頭」「句腹」という議論は漢訳に依存した言説であることが指摘し得る^{*7}。

参考文献

- [1] 春日政治. 西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 本文篇(乾)・研究篇(坤), 斯道文庫紀要, 第1巻. 岩波書店, 1942. 復刊: 勉誠出版, 1970. 『春日政治著作集 別巻』, 勉誠出版, 1985.
- [2] 田村晃祐. 最澄教学の研究. 春秋社, 1992.
- [3] 西澤一光. 上代書記体系の多元性をめぐって. 萬葉集研究, Vol. 25, pp. 185–228, October 2001.
- [4] 船城俊太郎. 変体漢文はよめるか — 『将門記』による検討 —. 小松英雄博士退官記念 日本語学論集. 三省堂, 1993.
- [5] 渡辺滋. 文書を書くこと・読むこと日本古代における音声言語と書記言語の関係を中心に. 駿大史学, No. 126, pp. 51–89, 2005.

^{*7} 付け加えるならば、[5]が指摘するように、黙読が普及し、行政などの事務処理において文書を音読せずに相手に差し出す方式が登場する8世紀後半～9世紀代の状況と、最澄の訓読批判が連動している可能性もあろう。また、西澤一光氏が「漢語に対するものとしての俗語の文字化においては、漢字本来の用法に対する仮名書きの非本来性が言語間の価値的な上下関係を意味するものに転化し、固有言語の周縁的性格が顕わにされるのである」と述べるように([3], p. 228) 上代における「日本語」の形成期において万葉がなによる表記がネガティブな印象を持っていたとすれば、それも最澄の発言に影響を与えている可能性もあろう。なお、[3][5]については、北條勝貴氏にご教示いただいた。感謝申し上げます。